職員の推し本

PICK UP!!

サンショウウオの四十九日

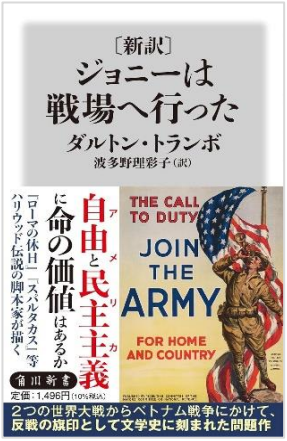
朝比奈　秋 ／新潮社

第171回（前回）の芥川賞を受賞したこの作品。冒頭から不思議な違和感で読者を混乱させるのですが、それもすべては主人公の『杏』と『瞬』が二人で一つの身体を生きる結合双生児であるため。周りからは一人にしか見えない二人。『私』とはなんなのか。その問いは、主人公と同じぐらいに稀有な生い立ちである父の兄（＝伯父）の死によってより深くなっていきます。萩尾望都の名作『半身』を彷彿とさせますが、著者はなんとその存在を知らずに書いたそう。難しいと思われがちな芥川賞受賞作ですが、読み口はとても柔らかくて読みやすいのでお勧めです！

新訳　ジョニーは戦場へ行った

ダルトン･トランボ ／ KADOKAWA

戦場で、四肢と顔面の大半と、触覚以外の感覚を失ったジョー。彼にできるのは思考することだけ。意識の中で過去と現在を漂いながら、唯一動く頭を枕に打ち付け、モールス信号で意思を伝えることを試みます。
第二次大戦中に発表されたこの本は、過激な反戦小説として何度か絶版となり、ベトナム戦争時に脚本家である作者が監督となって映画化されました。過去の思い出は鮮やかなカラー。現実の病室とベッドは白黒です。
原題は『ジョニーは銃を取った』。第一次大戦のアメリカの兵士募集のスローガン『ジョニーよ、銃を取れ』への皮肉が効いています。重いテーマですが、不屈の意志とユーモアさえ感じられる筆致に驚きます。



ねこホテル

ふくべ　あきひろ ／ PHP研究所

女の子は学校帰りに、世にも珍しい〝ねこ〟に泊まれる「ねこホテル」を見つけました。このホテルでは色々な部屋を楽しめます。
トランポリンで入る「へそてん」の部屋は、ねこのもふもふのおなかにダイブ！にくきゅうレストランで食事をし、にくきゅうベッドでお昼寝タイムも過ごせます。
私のお気に入りは、「ゴロゴロ」の部屋。うつくしい音楽で癒されたいです。
どうやらこのホテル、見える人と見えない人がいるそうですよ。いつか行ってみたいな～、と夢見ています♪